

◆ 朗読会 ◆

第1回	11月5日(土)	<p>大学祭朗読会</p> <p>演目：「野ばら」小川未明  「やまなし」宮沢賢治  『夢十夜』より「第一夜」「第三夜」夏目漱石  「野ばらの帽子」安房直子  「尾生の信」芥川龍之介</p>
第2回	2月12日(日)	<p>文学館朗読会</p> <p>テーマ：「いまの自分に、できること。」  ～寄り添って歩こう～</p> <p>演目：朗読チーム「セロ弾きのゴーシュ」宮沢賢治  「ねこはしる」工藤直子  すずの音 「チヨ子」宮部みゆき  「記念日」重松清</p>

◇ 大学祭朗読会の感想 ◇

報告 英語英米文学科1年 武田真奈

私は、今年度最初で最後の人前で発表させていただく機会が大学祭での朗読会でした。他のメンバーが既に発表経験を積む中で不安もありましたが、鈴木千秋先生の熱心なご指導、メンバーの練習に臨む姿勢、職員の方々の陰ながらのサポートに、私も朗読チームの一員として成功させたい！とやる気が出てきたのを感じました。本番当日は家族や友人はもちろん、多くの方々に私たちの朗読を伝えることができました。



ポスター作成：図書館

4年生の先輩方の朗読は大学祭で初めて聴きましたが、長い物語のはずなのにその長さを聞き手に全く感じさせず、その場面の情景が鮮やかに目の前に広がっていくようでした。物語に引き込み魅了させるといふ朗読を肌で感じ、先輩方や指導してくださる先生の偉大さを改めて知ると共に、私もゆくゆくはこんな読み手になりたいと強く思いました。

実は、朗読チームに参加して本格的に指

導をいただくまで、私は“朗読”と“音読”の違いがよく分かっていませんでした。お恥ずかしい話ではありますが、どちらもただ声に出して、聞き取りやすいように読むだけだと思っていたのです。しかし、自分の声にのせて物語を読むことで、ただ文章を黙読したり音読をするよりも、さらに深みのある物語の意味を、自分の想いも交えて共有出来ることが朗読の良さだと気づかされました。今回の大学祭での朗読会は、普段から何気なく話している時も、朗読をするときの様に大切に相手に伝えていきたいと思える良いきっかけになりました。



### ◇ 大学祭朗読会 ◇

報告 音楽芸術学科 2年 鈴木珠友



今年の朗読会は多くのお客様に来て頂いた事が印象に残っています。昨年と比べて今年はメンバーが増えた分、お客様の人数だけでなく朗読作品に関しても含め、内容の濃い会になったと思います。

私が特に今年らしさが出たと感じたのは、各作品を複数人で朗読した事です。私も昨年とは違いペアで読みました。また、作品が初めて勉強した「夢十夜第三夜」だった為、今まで1人三役で読んでいたのに対し、2人での掛け合いとなり、自身の今までの読み方や表現の仕方は相手と異なっていた事に気がつき、苦戦と新鮮な気持ちを感じていました。その中で2人で一つの作品を完成させる為の重要点は、2人で共通の作品理解をする事だと学びました。私は練習で必ず担当以外の文章も読んで内容と雰囲気をしっかり頭に入れてから声に出していました。その中で私自身が課題とし工夫した点は、声のトーンです。「第三夜」は暗く怖い内容なので、低音、音量、声色を変える為に注意しました。そして、本番が近づくとお互い確認をする事で、より良い作品にしていこうと意識を高めました。その様な今までにない経験ができたからこそ、本番でうまくできていたか不安でしたが、反省会で先生やOGの方々が「普段と違った雰囲気の作品だったけれど、しっかりと染まっていた」と嬉しいお言葉を頂け、自分の朗読に自身が持てる様になりました。昨年と比べて成長を実感する事ができて本当に良かったです。それは、先生や図書館の方々、OGの皆さん、そしてメンバーが増え活気づいた朗読チームの仲間のおかげです。今後も皆さんと楽しく頑張り続けていきたいと思えた大学祭朗読会でした。



◇ 神奈川近代文学館での朗読会 ◇

報告 日本語日本文学科1年 小野紘子

2年ぶりの外部舞台でした。小学・高校と演劇をしていたのでなにかと朗読と比較してしまうのですが、セリフや地の文を読むことも勿論だけれど、舞台に関しても異なる点があって新鮮でした。演劇では自分の出るシーンが終わったら舞台袖にはけますが、朗読では一作品が終わるまで舞台を去ることが出来ません。加えて私は最初と最後のパートだったので、より緊張とプレッシャーを感じました。



「セロ弾きのゴーシュ」での主な私の担当パートは、冒頭で楽長のセリフと、そのすぐあとの猫の場面のナレーションでした。読むキャラクターが直後に変わるため、声の高さや、“セリフから地の文”への意識の切り替えが難しかったです。地の文は“人の感情”を込めすぎず、しかし読んでいるのはやはり人間である」ので登場人物の動きや感情に合わせて過剰になり過ぎずに、そして読む部分が続くため一本調子にならないように調節する点が特に苦労しました。

先輩・卒業生の皆さんの朗読は読み方もそうですが、声が喉からではなくお腹から出ているということが分かる出し方で、私もそのような発声出来るよう目指したいと思います。大学祭の時よりも多くのお客様が聴きにきてくださって、朗読チームの存在をより知ってもらえ、かつ成功させることができ本当に良かったです。



ポスター作成：図書館



## ◇ 神奈川近代文学館朗読会 ◇

報告 日本文学科 4年 坂本紫緒里

2月12日に神奈川近代文学館で、朗読チームOGである「すずの音」の先輩方と合同で朗読会を行いました。この朗読会が、私たち4年生にとっての卒業公演となりました。朗読会当日は快晴ということもあり、100名を超えるお客様に足を運んでいただきました。

毎年この朗読会で感じることは、「聞いてくださる方のいることのありがたさ」です。私たちの朗読を真剣な表情で聞いてくださったり、時には涙を流していただけた際には、この活動を続けていて良かったなと思います。



今回の朗読会は「いまの自分に、できること。～寄り添って歩こう～」をテーマに、OGの先輩方の作品を合わせ4つの物語を朗読させていただきました。主人公が、様々な動物たちとの関わりの中で成長する物語。

【宮沢賢治「セロ弾きのゴーシュ」】弱く小さな存在が、友達と時の流れによって変わっていく物語。【工藤直子「ねこはしる」】子供の頃大切にしていたモノを、大人になって思い出す物語。【宮部みゆき「チヨ子」】大切な

日、そして人への支援の在り方を考えさせられる物語。【重松清「記念日」】全ての作品を通し、自分は今、卒業を前に何ができるのかを考えさせられた公演になりました。

自分が努力していることが結果として、希望しているものにならない時が人生にはたくさんあると思います。勉強や仕事、人間関係…自分が良しとしてやった行動が評価されないことは辛いことです。しかし、今回読ませていただいた作品を通し、大切なことに気づきました。たとえば、今の自分の現状が、間違いや失敗、落ち込み・停滞でも、それは無駄ではなく、必ず未来の自分に繋がっているということ。そしてそうやって前に進むことは、決して一人では、できなかつたり、気づかなかつたりするものであること。



「いまの自分に、できること」…卒業を前に私自身、やらなくてはいけないことへの焦りや、社会に出ていく不安から、大切なものを見失いそうになるときがあります。しかし、人と寄り添うことの中で、自分は生かされていることを忘れずに、少しずつでいいから進んでいきたいと思います。

もし、今自分のすべきことに悩んでいる人がいたら、今回私たちが出会えた作品にヒントをもらってみてはどうでしょうか？きっと読んだ後には、少し前向きな自分に出会えるはずです。